ひとくち法話

宝林宝樹（ほうりんほうじゅ）

（39）

ある医師とお年寄りの患者さんの会話です。その方は心臓が悪く長い間ペースメーカーを入れていました。医師が「そろそろペースメーカーを取り換える時期ですね」と尋ねたところ、次の返事が返ってきたそうです。「ハイ、機械の入れ換えはお医者様に、心の入れ換えは自分でします」と。手術が成功して喜んでも一時のことであり、老病死の問題があると気づかれたことを言っているのではないでしょうか。機械の助けを借りても心臓自体は悪いまま、この先寝たきりになるかもしれません。生活が変り人生が変るということもあり得ます。思い通りにはいかないものです。今日医療が進歩し命を長らえるようになり、生きる希望を持ち、その半面諦めがつかなくなる傾向があります。生老病死の理を聞いてもその現実に眼をそらしてしまうことが多いようです。

「生まれたら死す」という理（ことわり）はどう生きるかという問いかけにもなります。無常なるが故に今生きてあることが貴いという見方が生まれてきます。老境にあって自身の現実と素直に向い合い受け入れて、一日一日を大切に生き、そして死んでいくという覚悟が窺われて、ありがたく心打たれました。